

「ICT活用によってむしろ働き方改革は後退していかないか？」
なかなか光の見えない日々、「働き方改革」と「ICT活用」の先にある本当の希望について、一緒に考えてみましょう。

1 学校の働き方改革は単なる残業減らしではない

働き方改革といえば、「残業を減らすことだ」と多くの人が思っています。残業を減らすことは重要な一歩。しかし、残業を減らして教育の質も下がってしまったは大変です。

教育の質の向上はとても重要です。国としても、地域としても、個人としても平和で豊かな未来のために欠かせないのが教育です。エネルギー等の資源がほとんどないわが国が誇るべき資源は「人材」です。それを育てる学校の役割は非常に大きいのです。

教育の質の向上を図るためにこそ必要なのが学校の働き方改革なのです。矛盾しているように感じます。どうしたことなのか、掘り下げていきましょう。

2 学校の働き方改革が教育の質を上げるのを実現するのはなぜ？

第一に、教育の質を高めるためには安心して働ける環境が欠かせません。中教審答申（平成31年1月25日）には、重要なフレーズがあります。

「子供のためであればどんな長時間勤務も良しとする」という働き方は、教師という職の崇高な使命感から生まれるものであるが、その中で教師が疲弊していくのであれば、それは「子供のため」にはならない。

いわゆる過労死ラインを超えて働く教師が多い状況では、質の高い教育を実施するのは到底不可能です。ですから、働き方改革の重要な一歩が残業減らしであることは当然のことなのです。でも、それだけではありません。

第二に、若者が就職したいと思える魅力ある学校にするために働き方改革は必要です。

日本の生産年齢人口（15歳以上65歳未満）は急激に減少しています。こ

働き方改革とICT活用の原点をさぐる ——老若男女みんなに魅力ある学校を創ろう——

認定NPO法人 ほづかいどう学推進フォーラム 理事長 新保 元康



れからの20数年で、ほぼ70年前の昭和20年代ころの5000万人台に減るだろうと言われています。つまり、学校だけが人手不足なのではなく、社会全体が人手不足なのです。人の奪い合いが激しくなっているのです。

今のままでは、魅力ある企業等に人材は流れます。教育の質を持続的に上げるには、優秀な人材が次々と集まる魅力ある学校にしなければなりません。また、単に早く帰宅できるだけでなく、未来への希望が持てる学校でなくてはよい人材は集まりません。そのための働き方改革なのです。

第三に、年若い自分自身が安心して働ける学校にする必要があります。働き方改革は、あなたの未来にも直接影響します。皆さんは何歳まで学校で働きますか？ 定年は65歳になりますが、そこで辞められるでしょうか。生産年齢人口の急減を考えると、多くの方が70歳あるいはそれ以上まで働くことになるのではないのでしょうか。役職定年後は再び担任をする可能性もあります。働き方改革が進んでいなければ大変です。

3 学校DXがカギを握る

学校の働き方改革を実現し教育の質を向上させるには、ICTの力が必須です。簡単に言えば、ICTとは人間のパワーを効率よく拡大する技術です。図にあるように、A（長時間勤務を減らし）とB（教育の質を上げる）にはC（ICT）が欠かせません。

しかし、例えばパソコンを100万台入れたとしても、それだけでは何の力も発揮しません。それを有効に使う人間の知恵と苦手な人を助けるチームワークが必要です。

さらに、学校DXへの進化が必要です。アナログをデジタルに置き換えるということではなく、学校の日



常を丸ごと変えていくのです。ペーパーレスにした程度ではまだまだ入り口です。DXでは、「職員朝会全廃」「職員会議半減」「研究会はなしで学力向上」等、学校の当り前を見直したいものです。

4 学校の日常を変えるヒント

学校DXを実現し学校の日常を変えるヒントを考えてみましょう。

① 今、やれることをやる

タテマエを捨てましょう。立派な研究大会は誰かに任せておけばいいのです。理想だけを追いかけて、現実を見ましょう。日常が安定し効率がよいつきりとした学校をイメージしたいものです。

大谷翔平選手は、昨年「走る」という最も基本的なことを繰り返し練習したといいます。地味な「盗塁」を積み重ねWSの頂点に立ちました。ホームランや投打二刀流に目を奪われがちですが、今やれることを徹底的に実行した姿勢こそ大谷選手に学ぶべきところだと思います。

わたしが校長として勤めた学校では、研究大会をやめ日常改善に全力を尽くし、全国学力・学習状況調査と学校評価を上げることができました。小さな積み重ねの威力を感じています。(詳しくは、拙著「学校現場で今すぐできる『働き方改革』目からウロコのICT活用術」(明治図書)をご覧ください)

② 学校の働き方改革は自分の未来に直結している

70歳まで働く時代です。「歳を取った自分が働きたい学校を作る」この視点で、学校を見直すことが重要です。この視点は、校長との日ごろの相談の中もお互いに共有できるのではないのでしょうか。

「ICTは得意な若い人に任せています。ボトムアップの時代ですから」という話をよく聞きます。こうした学校では、やたらとICTは使わうけど元々の無理無駄が削減されず、働きにくい学校になっているケースもあるようです。役職定年後、そんな学校で働きたいですか？ 技術は若手に頼るとしても、マネジメントの手綱を手放してはいけません。

③ 「DX推進は最初が一番苦しい」と認める

「学校は時代遅れだ！ 学校DX頑張ろう！」といくららはつばをかけたもみんなはついてきません。「今まで通り」がとりあえず一番楽で成

〈連載テーマ③〉

「副校長・教頭の Work technique」

果がでます。DXの最初は苦しいのです。ここを率直に認め、「半年は一番苦しいです。でもみんなで助け合つてトライアルしませんか」と声をかけてはどうでしょうか。困難を共有し団結するのです。

④ 「後輩に苦しみを残さない」と考えると削減できる

「周りの学校はやっているのでやめられない」こうした声をよく耳にします。安定した時代はみんなと一緒でよいのですが、今は「激しい変化が止まることのない時代」(2024年12月25日中教審への諮問文)です。誰かが問題を解決するためにトライアルするしかありません。「後輩のために苦しみを残さない」と考えれば、勇気をもって改革できるのではないのでしょうか。みんなが楽しんで教育の質を上げる、そして希望の持てる学校にするのです。それが後輩の望んでいることです。

⑤ 問題解決とはWin-Winが原則

「教職員は楽になった。保護者はつらくなった」では上手くいきません。問題解決するということは、正しい誰かが勝ち残ることはありません。ステークホルダー(利害関係者)みんながWin-Winになることが大切です。

「そんなことができるのか？」と思われるかもしれませんが、でも大丈夫。ちゃんとできます。そのために必要なことは、まず「人口減少で保護者も地域もみんな苦しい」という原点を理解し互いの苦しさを共有することです。そして、「みんな苦しいのだからほどほどにできないだろうか」とざつとばらんに相談するのです。共働きは当たり前、介護やボランティアで忙しい方もたくさんいます。みんなが忙しいのです。Win-Winは難しいことはありません。

5 あなたの出演です

学校のすべてを知り尽くしている副校長・教頭だからできる学校DXがあります。愚痴より笑顔、完璧よりトライアル、会議よりざつとばらんな雑談がそれを実現するのではないのでしょうか。

昨年末の中教審への諮問文には「教育課程の実施に伴う過度な負担や負担感が生じにくい方」と明記されました。画期的な一文だと思います。未来の学校を創る主役はあなたです。